

OB・OGの

職場
探訪

仕事楽しい

～入社10年目、顧客の人生設計を支える～

日本生命・総合法人第一部法人職域リーダー
遠藤有希さん

時代を切り裂くビジネス街の中に創建当時のレトロな雰囲気が漂う東京駅。いま話題のスポットだ。丸の内北口改札を出ると右側にすらりと背の高い日本生命丸の内ビルが目飛び込んできた。営業パンフレットにも笑顔で登場する法人職域リーダーの遠藤有希さんは中央大学OG、2003年に経済学部を卒業した。企業の第一線で働く女性をテーマに話を聞いた。(学生記者 荻原睦=法学部4年)



断られてからが営業



スーツに身を包んだ遠藤さんは、OG探訪で緊張している学生記者を笑顔で迎えてくれた。今年4月に“社内派遣”として異動。法人職域リーダーとして、総合法人第一部に所属し、自らの仕事はもちろん、後輩の育成にも力を注ぐ。学生記者の質問を最後まで我慢強く聞いてくださる。後輩指導はこんな感じなのだろうか。

営業活動は「断られてからが本番。お客様のニーズをいかに引き出すかがポイントです」と言うあたり、キャリアを積んだ入社10年目・中堅社員の仕事力を垣間見たようだ。

ここまでのキャリアは入社後2年間、法人職域営業を担当。職域営業では、企業や官公庁などに籍を置く個人顧客に接した。保険のアドバイス、ライフプランの提案などを行ってきた。顧客の予定に合わせ時間外で対応することも。3～9年目は新入社員の研修・育成などを担当した。

ある1日



ある1日の業務行動を聞いた。午前8時ごろに出勤し、日本経済新聞などの

新聞を読み、取引先企業に関する専門紙に目を通す。昼からは後輩の職域営業に同行。帰社して席を温めるヒマもなく、ミーティングや書類の整理を行った後、夕刻は企業の従業員向けライフプランナーセミナーの講師を務める。夜8時ごろまで仕事を続ける日もあるが、一息ついた時に、新たなアイデアが浮かぶこともある。

首都圏を中心に活動している。最近では出張が増えて頻繁に東北へ。「秋田、新潟、福島…」仕事が終わったら土地のおいしいものを堪能する。

「お客様のための第一に考えています」。レベルの高いサービスをしようと入社後、2級ファイナンシャル・プランニング技能士資格を取得した(日本FP協会認定)。こうした日ごろの心がけが取引先から信頼されている理由ではないだろうか。

営業先で中大出身者に会うと「私は経済学部です、そう7号館」と母校多摩キャンパスの話で盛り上がることもある。中大OB・OGは各所で頑張っているという。最近の休日は「2年前から趣味で始めたゴルフ」を楽しむ。



資料を手に業務内容を説明する遠藤さん

成長をゆっくり見守る



女性が多い営業組織のリーダーとして、後輩の育成に当たる。育てる立場として「後輩の成長を長期的視点で観るように気をつけています」という。一喜一憂しない上司がいてくれるとありがたいと思う。

楽しいことばかりではないが、「やりがいのある仕事ですね」と笑顔で答えてくれた。保険の魅力は「万一の時に安心を提供できる」こと。「以前、個人向けの保険を担当していたとき、まだ4代のお客様が、幼い子どもを残して急逝してしまうという出来事が起きました」。目に見えない『保険』という商品の意味をその



東京駅のすぐ近くにある日本生命丸の内ビル(左手前)

時理解したという。

企業を相手とする現在の仕事では、会社の制度などを幅広く勉強できる点にも新たな魅力を感じている。新たな発見は自らのレベルアップ、顧客サービス向上へとつながっていく。

長く働ける環境



中大時代、就職活動中は「業界を絞らずに企業を見て回りました。会社選びでは、長く働ける環境を求め、女性が多く働いていること、若くてもある程度自分に任されて仕事ができることを望んでいました」。

学生生活はゼミ活動を中心に過ごした。ゼミでは経済思想について勉強。サークル、アルバイトにも精を出した。大学時代を活動的に過ごし、多くの人と出会ってきたことが現在の人と接する仕事に役立っているという。

学生記者は就職活動中に女性の働き方について悩んだ経験から、社会人の先輩としてワークライフバランスについて聞いてみた。遠藤さんのまわりには、育児休暇などの制度を積極的に利用している人が多いという。日本生命はことし11月に「目指せ!イクメンの星ハンドブック」を作成し、子育て世代の支援に乗り出している。

会社は意欲の高い人には、チャンスを与えてくれると考える。女性が仕事と家庭の両立を考えると、「どちらか一方を選択するのではなく、両方頑張りたい」と働く女性としての意見をもらった。最後に中大生へのメッセージをお願いした。「学生時代は時間がたくさんあります。自分と向き合う時間を大切に、一生の仲間をたくさん作り、好きなことを思う存分してください」。優しく語りかける笑顔に思わずうなずいた。